

## 今月の1冊

『悪さをしない子は  
悪人になります』

廣井亮一／著

新潮新書 二〇二三年 八五八円（税込）

節分にも「時代の波」でしょうか。「豆まきを伝えるニュースの多くで「鬼は外」の声は聞かれず、代わって「鬼は内」の声も。鬼が土下座して感涙する映像も流れていました。

閑話休題。かつて本欄で『いい子に育てると犯罪者になります』（岡本茂樹著、新潮新書）を取り上げたことがありましたが。今度もまた、一瞬首をひねりたくなくなるような書名です。でも大丈夫。

「風が吹けば桶屋が儲かる」ほど難解ではありません。家庭裁判所調査官や大学教授として、長い間、少年非行問題等に取り組んでこられた著者が、培った経験をもとに、多くの事例を挙げてやさしく解説してくれます。

著者の犯罪・非行臨床の原点になっているのが「悪理学」だといえます。聞きなれない言葉ですが、「悪」は個人の問題より「関係性の問題」ととらえる点が勘所です。この点を押さえて、次のワン・ツー・スリーを理解すればスッキリします。

その一。「非行、犯罪やいじめなどの問題行動のほとんどは、攻撃性の歪んだ発動によるもの」。攻撃性が「悪さ」を引き起こすのです。

その二。その攻撃性は「親や教師など子どもにとって大切な人との関わりによって、主体性、積極性、自主性といった『生きる力』を獲得するための肯定的行動にもつながる」。攻撃性は「悪さ」の元凶になり得るだけでなく、「善さ」に向かうチャンスでもあるのです。

その三。それゆえ、「反抗や反発を単に力や罰で抑え込んでしまうと」、善い方向に向かう道を塞ぐことになりかねないわけです。「悪は正しく取り組むべし」。それが著者の「悪理学」の集大成になったと考えられます。

二部構成の前半は、このような「悪理学」の解説です。続く後半の「非行を治す」では、家族療法、問取図アプローチ、司法臨床、関係機関のアプローチ、アンコモン・アプローチ（アンコモンは直訳すれば「珍しい、まれな」で、本書では、苦行療法と現実療法を紹介）が取り上げられています。

少年非行（刑法犯少年千人比）は、平成一五（二〇〇三）年に最後のピークを迎え、以後減り続け、令和三年は最多期の八分の一となっています。学校での非行対応もずいぶん少なくなりました。そんな中でも、非行臨床の知見は生徒指導に大いに役立ちます。「決して見捨てない」姿勢は、これからも大切にしていきたいと思えます。

「悪い鬼なんていない」。節分の夜、改めて感じました。

神田外語大学客員教授 嶋崎政男

